

津波で消えた海岸防災林を再生

ジェイアール・イーストユニオン
(JREユニオン) 仙台地方本部

齋藤 勝彦さん・柘窪 吉則さん

宮城県名取市。海岸が見渡せる堤防に登ると、茶色の土の上にクロマツの緑が確実に広がりつつあるのがわかる。

公益財団法人オイスカが行っている東日本大震災復興支援「海岸林再生プロジェクト」である。津波にさらわれた海岸林―全長5km約100haの復活をめざし、2011年から被災農家とともに海岸のマツ林を再生する取り組みをしているのだ。これまで名取市を中心に全国から延べ約1万4000人のボランティアが参加し、活動を続けてきた。

高まったボランティア活動の気運

阪神淡路大震災が発生した1995年は、「ボランティア元年」といわれる。大震災を機にボランティア活動の機運が高まり、日本にもボランティア文化が定着した。

JR連合が社会貢献活動を検討。模索しはじめたのもこの大震災がきっかけだった。そして、アジア・太平洋地域で地球環境保全活動や農業支援を展開するオイスカの理念に賛同した

JR連合は法人会員として共働することになる。

2011年、東日本大震災が東北地方を襲った。JR連合もオイスカの立ち上げた支援活動に参加する。それが名取市の海岸林再生プロジェクトであった。特に大震災を経験した西日本エリアに住む組合員の関心は高く、大阪や九州から参加する組合員も少なくなかった。

一過性の支援で終わらせないためには、やはり地元の組合が立ち上がるべきだと、このプロジェクトは、ご当地ジェイアール・イーストユニオン(JREユニオン) 仙台地方本部が中心となって推進することとなった。

組合員として地元民として地域を支援

2023年11月18日、この年最後の活動にボランティアとして参加していた仙台地方本部の齋藤勝彦執行委員長、柘窪吉則事務局長に話を聞いた。

JR連合の働きかけにより仙台地方本部が中心となつて海岸林再生の活動を始めたのは2020年11月から。

最初の参加者は10人ほどだったが、組合員の意向で年1回の活動は翌年から2回に増えたという。

ボランティアが担う作業は、クロマツの育苗や育林。具体的には、下草刈りやツル切り、排水溝の修繕などである。釣り人が放置した海岸のゴミ拾いも行う。土砂降りの雨などで作業ができない時は、津波に襲われた小学校の校舍跡などを見学させてもらい、津波の被害の大きさを実感した。

「年に1〜2度だけの参加だし、最初は僕らのやったことが本場に役に立っているかどうかわからなかった」「でも、何のためにマツを植えるのかということがかつてくると、自分にとってのボランティアの意味は変わりますね」と、お二人の口調が少しずつ熱くなってくる。

陸前高田市の「奇跡の一本松」は、東京に暮らす私たちの記憶にも焼きついているが、マツ林が海からの風や潮、海岸の砂を遮って田畑や集落を守っているということにはなかなか考えが及ばない。そして、これらのマツが人の手で一本一本、植えられたものだということ



齋藤さん(左)と柘窪さん(右)。午前の作業を終えて

とも……。 「マツ林の中は風が通らないし、湿度がすごい」「夏は暑くて、本当に水がほしかったよね」

下草刈りが「一番大変だ」と思っていたら、今年6月に行つた蔓性多年草のクズ切りが「もっと大変だった」との弁。クズは繁殖力が高く、土壌の栄養を奪い、マツなどの植物にからみついて日光を遮り、成長を妨げるのだ。作業中にごろごろした岩やぬかるみに足をとられて転んだり、鍬(くわ)の使い方のコツを思い出せなかつたりと、1年に1〜2回だからこそ大変なこともある。

「でも、作業を始めて気がつくとも夢中になって、真剣に手を動かしている。大変だし疲れるし、来年はもう辞めよ



終礼でJREユニオンを代表してあいさつする齋藤さん(中央) オイスカ・吉田担当部長(右端)



水を流す排水路の整備。鍬を用いて溝を切る「溝切り」作業

うと思うんだけど、毎年来てしまいうんだよね」と齋藤さん。最近では使命感や達成感も感じられるようになっていったという。



2021年11月のボランティア活動に参加した際の海岸林の様子。プロジェクト開始当時から確実にクロマツの緑が広がっていることがわかる。



盛り土の土は所々粘土質。足をとられないように鍬を振るう齋藤さん

「誰かのためであり自分のためでもあると思えるようになったかな。やっぱり、みんなといっしょに汗かいてみないと、わからないのかもしれない」と栃窪さんも続ける。

地域を支え ネットワークを拡げる

この海岸林再生プロジェクトは、リピーターが多いことも大きな特徴だ。お二人とも個人的に家族で参加して子どもたちにボランティアの経験をさせたという考えているという。

午前9時、作業開始。今日、全国からこの活動に参加する人は午前82人、午後87人だ。みな、長袖・長ズボン、カップ(それに類する上着)、長靴、帽子と軍手という出で立ちである。

指導員と参加者の紹介の後、プロジェクトを統括するオイスカ啓発普及部担当部長の吉田俊通さんから今日の活動内容と注意事項が告げられる。

海水の塩分微粒子や硫酸塩を含んだ土壌が電柱の碍子や植物に悪さをすること、足場が悪いので転倒しないように注意すること、排水のための溝切りのしかた、鍬の使い方など。ちなみに鍬のくさびは参加者である鹿島建設の方がすべて点検してくれたという。経験豊富なリピーターは初参加の人たちの間に入って道具の使い方のレクチャーをすること、疲れたら無理せず休憩することもつけ加えられた。関東で「ひつぎ虫」と呼ばれる衣服に張りつく「アレチヌスビトハギ」のことを宮城弁では「バカ」というなどの楽し

い雑学も披露してくれた。

各自持参した昼食をばさんで午後16時に本日の作業は終了。解散となった。

参加者は、作業する中で海岸林の必要性、ボランティアの意義、環境保全の重要性を心と体で実感する。さらにこういった活動ならではの仲間とのネットワークの広がりも見逃せない。リピーターにとっては、クロマツが少しずつ確実に大きくなっていくのが感動的なのである。地域と共働する仙台地方本部のお二人は、どんな感想をもっているのだろうか。

「震災直後は支援物資をはじめ全国からの応援もあり、今、東北の復興はかなり進んできていると思います。一番うれしいのは地域の絆が一層深まっていると感じられること。このボランティア活動のなかでも人々の絆が繋がっていくのを実感しています」(齋藤さん)

「すでに震災から12年。震災の記憶は徐々に忘れ去られていきます。ですから、僕らは震災の被害や支援してくださった人たちのことを次世代の組合員や地域の人たちに語り継いでいかなければならない。ボランティア活動もそのためのひとつの手立てになると思うのです」(栃窪さん)

仙台地方本部の活動も、さらに広がっていくことを期待したい。